評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
①学習指導	確かな学力の育成	生徒が主体的に学習に取り組む態度を高めるために，わかる授業を展開する。授業内容によっては，TT指導や支援員の効果的な活用により、きめ細かな指導を実施する。 また，教材研究に努め，ワークシートや資料の工夫，ICT教育機器の有効な活用を図る。 家庭学習の充実を図るために課題やプリント・副教材の演習問題など積極的に提示し，実施の有無の確認や評価及び主体的に取り組むための支援に必ず取り組む。	生徒が主体的に学習に取り組むことができ，わかる授業づくりに取り組む。TT指導や支援員の積極的な活用と授業教材やICT教育機器の有効活用を取り入れる。	最初に「めあて」を提示して授業に臨み，説明を聞く場面，知識・技能を習得する場面，思考する場面，表現や発表する場面を明確にし，生徒が授業で，知識・技能を習得し，思考・判断・表現する力を育成する。授業の終わりでは「自己の振り返り」を行うことで，学びの成果を実感させ，学んだことや意欲・問題意識等につなげ，家庭学習や次時の授業につなげていく。	A	生徒が主体的に学習に取り組み，わかりやすい授業が展開されるとともに，学級全体が学習へ向かう態度が向上し，生徒の自己学習力が向上している。	授業のはじめに「めあて」を提示することとおわりに「振り返り」を行わせることについては、生徒アンケート（2学期）によると98%と93%行っているという結果になった。ほぼ全ての教科において実施することができた。また、聞く場面、習得する場面、思考・判断・表現する場面設定を意識して授業を組み立てることにより、わかる授業に繋がっているのではないかと思われる（生徒アンケート「先生の説明や進め方はわかりやすい」89%）。しかしながら、特別な支援が必要な生徒への配慮や個別指導に課題があると感じている教職員もおり、TT指導の充実や支援員等の有効的な活用の他にも解決策を考えていきたい。	B	・授業における「めあて」と「振り返り」のスタイルが，ほぼすべての教科において定着し，生徒が学習内容を十分理解し，生徒の学習意欲の向上やわかる授業につながっていることが伺える。また，生徒による学校評価にも表れているように，教員によるそれぞれの場面設定を意識した授業の組み立てに工夫を凝らし，分かる授業を展開されていることは生徒にも支持されていることが分かる。 一方，教職員による学校評価で，担当の先生の時間が足りず，周りの先生にも申し訳ないと思われている記述があり，気になる。また，特別な支援が必要な生徒や個別学習に対しての対応は大変とは思うが，学年部での協力やTT指導の充実，学校支援員の活用等に改善の余地があるようなので，取組の工夫をお願いしたい。 ・家庭学習の状況を見ると，評価Aの生徒の自己学習力の向上まで至るには，授業→家庭学習→授業の連動性で学びと肯定評価の連続性をもたせていく必要を感じる。そのためにも授業における「振り返り」から何につまづいたのかを自分が把握し，それをすぐに解決しにいける質問しやすい環境づくりが必要ではないだろうか。担当教員に加えて支援員による解決コーナーを設けるなど，より有効的に活用してほしいが，それには支援員の補充が必要であると感じる。	B	・授業における「めあて」と「振り返り」やメリハリのある場面設定（聞く／習得／思考・表現・判断）を引き続き徹底していくことで，特別な支援が必要な生徒にとっても分かりやすい授業を展開していく。 ・特別支援教育コーディネーターを中心に，関係機関と連携しながら，LDや特別な支援を必要とする生徒への個別指導を充実させるために，ケーススタディや授業前後打合せ，授業後の情報交換を行い，TT指導や学習支援員を有効的に活用する。 ・授業と家庭学習が連動するように，授業の「まとめ」と「振り返り（自己認知）」のやり方を工夫する。その上で，生徒の到達度に応じた家庭学習の提示の仕方や点検方法を改善していく。
			学力向上につながる家庭学習の充実を図るために，各教科で示された学習の取り組み方や家庭学習の方法をもとに，家庭学習への意識を高める。また，生徒が積極的に家庭学習に取り組めるように各学年および各教科で家庭学習課題の提示と確認・評価をしつつ，個に応じた課題提示の工夫をする。	学力向上を図るための家庭学習を習慣化させる。 ①各教科の家庭学習課題を提示する。 ②各学年の自学ノートの取組の充実を図る。 ③定期・習熟度テストへの家庭学習取組表の実施を行う。 ④家庭学習調査を行い，毎日の学習時間目標を平均90分以上とする。ただし，テスト期間中は120分以上をめざす。	A	各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続して行い，家庭学習習慣が定着している。（平日90分超，テスト期間120分超）	学力向上を図るための家庭学習を習慣化するための取組①については、各学級の時間割黒板に提示し、未修者に対しても細かく指導した。取組②については、今年度は自学ノートのみと指定せず（使ってもよい）、まさに生徒の自主性に基づいて計画・実施・振り返りの形を取った。取組③については、定期テストの2週間前、習熟度テストの1週間前より（3年生）、家庭学習取組表を活用して取り組ませた。取組④家庭学習調査（12月初旬）を行い、1年生平均（平日54分／休日59分）、2年生平均（平日47分／休日53分）、3年生平均（平日78分／休日117分）という結果であった。また、「毎日家庭学習に取り組んでいる」と答えた生徒は65%、「わが子は、家庭学習の習慣が身についている」と答えた保護者は45%という低い数値であったことから、家庭学習の習慣化は不十分であったといえる。自学ノート復活を願う保護者の声もあり、次年度に向けて、家庭学習への指導のあり方について検討が必要と考える。	C	・自学ノートを使わずに自主的に学習をしている生徒もおり，生徒の自主性に任せる点ではよいこととは思う。また，家庭学習の充実のため取組4項目について，少し踏み込んだ指導や提示に取り組まれたようにも感じる。そのためアンケートによる数値が低位で，取組が不十分と自己評価欄にあるが，即効性のある手法をすぐに確立することは困難なので，試行錯誤を繰り返しながら，引き続きの取組を願う。 ・保護者による学校評価の「一人一人の学習状況に応じた指導」と「家庭学習の習慣」は似た数値にあるが，関係していると思う。家庭での学習は，生徒自身が自らの状況を考え，計画し，実行できればよいが，何が分からないか分からない生徒には厳しいと思う。自主的に学習できる生徒は別として，その生徒の学習レベルに応じた課題を用意し，また，その量も生徒によって分け，その生徒の目標に対してある程度道筋をつけてあげられたらと思う。本人にとって何ができていて，何ができていないのかが分からないと家庭での指導も難しい。 また，自学ノートの取組もここ数年定着しつつあったが，さらに個々に応じたきめ細かな対応が可能であれば，ただ自学ノートを復活させるのではなく学年に応じた取り組み方をしてほしい。学校からの各教科の課題提示や個々の生徒に対してのきめ細かな対応と家庭学習の仕方など学習意欲を促す工夫が必要ではないかと思う。 例えば，1年時は家庭学習の定着だけを目的に課題プリントをひたすらやるが，2年時に定着してきたらプラスで自学ノートを導入していく。自学ノートにも段階的に慣れていけるように配慮していく。3年時では，受験対策を自学ノートで取り組むなど。平均してどれだけやっているかより，生徒一人一人の能力にどれだけ寄り添っていけるかの部分の見直しを求める。	C	・生徒の学習に対する主体性を育成する一つの手段としての自学ノートの取組であるが，自分で考える力の弱い生徒に対しては，細やかな指導をしていく。 ・学年によっては，家庭学習が習慣化しておらず，小さな課題さえコツコツと取り組めない生徒も多数いる。学習意欲を喚起するためにキャリア教育を充実し，特別支援教育の視点に立った支援方法を用いて，個に応じて手厚く指導していく。
					B	家庭学習の提示と確認・評価を継続して行い，生徒の家庭学習時間にバラツキがあるが，全体としては家庭学習が習慣化している。（平日60分超，テスト期間90分以上）					
					C	家庭学習の定着が不十分であり，全体として家庭学習が停滞傾向である。（平日60分未満，テスト期間90分未満）					
					D	家庭学習の重要性を意識せず，全体として家庭学習時間が不足しており，習慣化にはほど遠い。（テスト期間でさえ60分未満）					
	人権・同和教育の推進	一人一人が認められ，差別や偏見を許さない人権感覚と実践力を養い，安心して活動ができる学校をつくる。	自他の人権を尊重し「差別をしない生き方」ができる力を育てるために，人権集会や人権講演会等を通して，生徒が考える場を設定する。	身近な生活の問題から，自分や周囲の人の人権について考える時間を設定する。 昨年度に引き続き，性の多様性について考え，意見交換をする場を設ける。 日常の生徒の様子に応じた指導，助言をする。	A	人権集会や人権講演会を通して，生徒が一人一人を大切にするとはどういうことか，そのためには自分はどうしたらよいか考え，意識して行動する。	邑南町役場に勤めておられた藤彌葵実さんに「性の多様性」をテーマとした人権集会の講演を依頼した。藤彌さんが県外に住居を異動され来校することが難しいということで、zoomを利用しテレビ画面に映しながら講演を視聴する形で実施した。藤彌さんとの事前打ち合わせを繰り返し行い、本校の生徒の実態を伝えて、限られた時間の中でポイントをしぼって話をしていただくことをお願いした。「性別」には「身体の性」だけではなく、「心の性」などさまざまな要素があることを知ること、性の多様性の学習を通してみんなが自分らしく生きることの大切さについて考えることをねらいとして、12月5日に人権集会を実施した。講演の中でLGBTQ+など、それまで知らなかった言葉が出てきたことで、生徒は「難しかった」と感じたようである。しかし、振り返りで「難しかった」と答えた生徒の中にも、「難しい言葉が出てきたけど、少しでも知ることができた。性の多様性についてもっと知りたい」「今まで知らなかったことが知れて良かった」「自分について考えるきっかけになった」と感想を書いている生徒が多かった。藤彌さんが実際に経験されたことをもとに話をされ、生徒もそれを真剣に聴いて身近な問題としてとらえ、自分らしく生きることの大切さや自分も他の人も大切にするためには自分がどのように行動していけばよいかを考え、自分の思いを記述していた。自分の性に違和感を抱いている生徒の中には個別の相談を希望している生徒もいるので、引き続き藤彌さんと連携し、個別相談を進めていく。また、事後学習としてNHK for Schoolの教材を活用したが、生徒が意見を出しやすく、素直な気持ちを表現していた。来年度も身の回りの人権課題について考える機会を設定し、事前事後学習なども取り入れながら、人権に対する意識を高めていきたい。	B	・今年度も人権講演会や人権集会を実施され，自分を見つめ直し他者を思いやる心を育んだことは大変意義のあることだと思う。「性の多様性」へのアプローチとして藤彌葵実さんの講演を企画されたのは，素晴らしい取組である。単純に「性」をカテゴライズしないというテーマだと思うが，おそらく藤彌葵実さんのお話される雰囲気や様子から，難しいテーマでも生徒達に響くものがあったのではないだろうか。これから成長していく中で，きっと生徒達の心に残る経験だっと思う。社会に出ても無知なため違和感や嫌悪感を覚えることのないよう認め合う心を育むことができているので，あとは行動につながるとよい。 しかし，認めようとするがゆえに少数派を優先しようとする「行き過ぎ」や制度が整っていない中で実行をする「急ぎすぎ」によって衝突が生まれるので，バランスと互いの歩み寄りを大事にしてほしい。 また，自分の個性を自分が大切にできるからこそ，人の個性も大切にできるということを今のこの社会や集団生活の中で，どのように学び続け，自分に落とし込んでいくか，性の多様性とともに引き続き自分らしく生きることについてそれぞれが内省できる時間もあるとよい。	B	・来年度も人権集会等を実施し，人権について考える場を設定する。講演講師についても，テーマを早めに設定し，幅広く情報を集め，決定していきたい。
					B	人権集会や人権講演会を計画的に実施し，生徒が人権について考える。					
					C	人権集会や人権講演会等を実施するが，内容が生徒の実態と合わない。					
					D	人権集会や人権講演会等，人権について考える機会が設定できない。					

①学習指導	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ，表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	朝読書を継続して行い，学校図書館利用増をめざして読書推進活動を充実する。	「利用しやすい図書館」として，図書館利用者の増加，家庭での読書の習慣化を図る。教科学習においての図書館利用にも一層の活用を推進していく。読書ノートの活用を継続することで，充実した読書記録とする。	A	図書館利用が増加し，自主的な読書が定着（1日30分以上）※朝読書を除く。	生徒の興味・関心がある本をリクエスト本として定期的に購入し、入庫後すみやかに放送で紹介した。図書館だよりや委員会活動での情報提供、季節や行事ごとのレイアウトを工夫し、生徒が図書館に立ち寄って本を手に取りやすい環境作りに取り組むことができた。授業の内容と関連させた掲示を作成し、生徒の実際の声を用いて図書の宣伝をすることにも取り組んだ。各教科に関連する図書や、特別支援学級専用に辞書を購入するなど、職員の要望を参考に図書を購入しようと心がけた。 図書の貸出は、貸出は毎月一定数あるが、2、3年生は学年が上がるにつれ貸出冊数が減少している。【資料3】 自主的な読書の定着・習慣化の状況については、学校の朝読書ではない時間にも読書をしている生徒がどれほどいるかで把握していきたい。アンケートの結果【資料1】【資料2】から、「自宅で読書をする」と答えた生徒は全校生徒の45%と、昨年に比べ8.5%上がった。「自宅で読書をしない」と答えた55%の生徒が読書をしない理由としては、「時間がない」が8%、「他にすることがある」が49%、「好きでない」が40%だった。その他にも、「面倒くさい」「家に本がない」「読みたい本がない」という意見があった。しかし、毎日の読書時間については、朝読書の10分を超えて読書に取り組む生徒の割合が61%であることから、自宅にいる時間以外の時間を利用して読書をしている生徒が半数以上はいると考えられる。 「本を読むことが好きか」という質問については、「好き」「やや好き」と答えたのは全校生徒のうち69%で、1年76%、2年63%、3年68%という結果であった。自宅での読書が習慣化していなくとも、読書そのものには好意的である生徒もいることがうかがえる。これらの結果から、これまで継続して行ってきたリクエスト本の購入や情報提供、本に親しみやすい環境作りに加え、生徒が読書、本に興味を持たせる工夫をする必要があるだろう。学年によっては、さまざまな種類の本を数分という短い時間で試し読みする「味見読書」を授業で行ったところもあった。国語科・図書館司書を中心に、本と触れる機会を設けることで、読書に好意的な生徒がより読書に親しめるようになるとよいと考える。	B	・生徒の興味・関心のある本や学習に役立つ本を定期的に購入し，図書館の利用促進を図っているのは素晴らしい。また生徒が立ち寄りやすい図書館をテーマに，レイアウトを工夫するなどの環境づくりや授業の内容と関連させた掲示を作成したり、生徒の実際の声を反映した図書の宣伝に取り組んだり、とてもよいアイデアである。 ・本からテレビへ。テレビからゲームへ。それらをネット上でいつでも遊べるスマホへ。時間消費するコンテンツが増える中で本を読むことは特別になっている。またファストコンテンツを慣れた子に読書は面倒になる。 また，本の読み方についても，読み始めたら初めから全部読まなければならないと重く受け止めている子や自分には合わないと感じても借りたからには読まなくてはならないと思い込んで苦手意識をもっている子もいるのではないか。ただ，本を読むことが好きな生徒は思ったより多いので，「味見読書」のように，機会の強制から興味のわく本に出合うようなチャンスがつくれる面白い取組を継続してほしい。	B	・本を読むことが特別になってきているこの時代に，本の魅力を伝えることも学校図書館の役目である。生徒や教員のおすすめの本を紹介したり，授業の中で図書館に置いてある本をさまざまな教科の先生方に紹介してもらったりしながら，一人でも多くの生徒が本を手に取ってみようという気持ちになるような声かけが必要である。そのためには，やはりさまざまな教科担当の教員からもっと積極的に情報収集しながら，各教科等に関連した図書を入れ，宣伝していきたい。また図書との向き合い方を伝えることも工夫であると思う。本は全部読まなければいけないといった思い込みを払拭させ，目次や見出しなどで情報を収集する方法もあることを提示できたら有効である都考える。 さらに，数種類の本を数分という短い時間で試し読みする「味見読書」を取り入れるなど，本と触れる機会を設けることも検討していきたい。
					B	図書館利用が増加し，自主的な読書が定着・習慣化（1日10～20分）※朝読書を除く。					
					C	図書館利用が増加したが，自主的な読書が不十分（10分未満）※朝読書を除く。					
					D	図書館利用が増加せず，自主的な読書も不十分（10分未満）※朝読書を除く。					
	言語活動の充実	「つながる力の育成」のために各授業で積極的に話し合い活動を行い，自分の考えを伝え合い，深め広げる授業づくりに取り組み，思考力・判断力・表現力の向上をめざす。	各教科等で，自分の考えをもち，伝える手だての工夫，話し合い活動を通して考えを深めることのできる題材の工夫をする。	全教科の授業で自分の考えをもち，考えを伝える場面の設定をする。そして，「話し合い活動」を活用して，生徒の考えを深め広げる。	A	各教科で工夫した「話し合い活動」を実施し，思考力・判断力・表現力が向上した。	教員アンケートで、「自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの場を工夫して設定」が「十分できた」・「できた」教員は94.4%、また、1学期の生徒による学校評価で「授業では学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」の肯定的意見は81%と8割を超えている。また、生徒による学校評価の「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」の肯定的意見が1学期は88%から2学期は93%と向上している。教員の実践が生徒にも肯定的に受け止められ、話し合い活動の質の向上がなされていると期待できる。6月には「話し合い活動」の充実のため市教委指導主事を招いて研修を行い、全職員で共通理解のもと実践を続けている。市、県学力調査の結果を分析し、引き続き「話し合い活動」の充実をめざした取組を続けたい。	B	・教職員や生徒による学校評価でも「話し合い活動」の成果は挙がってきている。各教科で工夫した「話し合い活動」を実践し，生徒も自分の考えを深め・広げることができるようになっており評価できる。加えて，その力が向上するよう期待している。また，生徒による学校評価の「道徳の授業では，自分の考えを深めたり，学級やグループで話し合ったりすること活動に取り組んでいる」の項目では，相互理解のための話し合いが出来ているという肯定的意見が増え，言語活動の充実への取組が功を奏していると感じる。 ・「話し合い活動」を通して，相手に対しても自分の意見を広めることだけでなく，相手の意見を理解・尊重し，自分と照らし合わせる事によって，さらに自分を成長させてほしい。また，それぞれの意見の根拠を伝え合うためには，対話を繰り返すことや反復練習が大切だと思うので，意見を言える子どもばかりでなく，内向的な子にも積極的に発言のできる機会を設けるよう意図的に取り組んでもらいたい。そのための教職員全体のファシリテーション能力の向上を願う。	B	・話し合い活動により，相手の意見と自分の意見を照らし合わせ，そこから自分の意見を練り上げることができるように「話し合い活動の展開」を工夫する。例えば，ホワイトボードで発表した場合，相違する意見に印をつけ，その意見の根拠を発表させ，再度どちらの意見がよいかを生徒に考えさせるなどがある。また，「お題」を示すことで，毎日提出する「あゆみ」へのコメントを書きやすくする，学級での一言スピーチ等を継続して行うなどの工夫をし，生徒が自分の思いや考えをまとめる力をつけていく。
					B	各教科で工夫した「話し合い活動」を実施した。					
					C	ほとんどの教科で「話し合い活動」を実施した。					
					D	「話し合い活動」の実施が不十分だった。					
②ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	将来に生きる大きな夢や希望を育む。「江津の明日を創る人」を育てるために，ふるさと・江津に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し，各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む職業人講話、職場訪問，修学旅行、上級学校調べ，職場体験等の活動が系統的に，より一層充実するように努める。また，地域の「ひと・もの・こと」を活用することで，地域の魅力や課題の理解を進める。	A	全学年において，ふるさと・キャリア教育の取組を複数回計画的に実施した。	第1学年では、学期ごとに地元で働く方のお話を聞く機会を設けたり、地元企業を訪問し、知り得た内容をもとにプレゼンテーションを作成したりする活動を通じ、江津のよさを再確認し、自分の将来と関連させて考えることができた。 第2学年では、修学旅行の行程に造船所の海上クルーズを加え、エネルギー産業の変遷と現状について考える機会を設けた。また、3学期には上級学校調べを行い、中学校卒業後に学ぶ場についての理解を深めるとともに、進路選択に向けて、その関心をさらに高める場にしていきたい。 第3学年では、進路説明会を通じ、中学校卒業後の進路選択について高校等の先生方のお話を実際に聞くことで、より関心を深めることができた。また、2学期には市内のさまざまな事業所の協力を得て職場体験を行った。地域の方々の働く姿を見たり、お話を聞いたり、実際に自分で体験したりすることで、今後の生き方を考える機会となったことに加え、ふるさと江津の「ひと・もの・こと」のよさを再認識することができた。	B	・感染症対策への苦悩の中，限られた時間に3学年とも，創意工夫の取組がなされた様子がよく分かる。このふるさとキャリア教育で地元企業の訪問や地域で働いている方の話を聞くことは，今後の進路選択においてふるさとの選択肢が出てくるため重要である。また職場体験がコロナ禍のなか，43ヵ所の事業所や団体の協力のもと実施できたことはよかった。生徒たちは自分の進路，将来に対する思いと同時にふるさと江津のよさや働くことの楽しさや意義を再認識されたことと思う。これからも生徒の人生設計のヒントとなるような取組を行っていただきたい。併せて先生方も生徒たちに最も身近な社会人として模範となるような行動をお願いしたい。 ・地域ではコミュニティ等が主体となって様々な活動を行っているが，中学生が参加しにくい状況である。地域コミュニティや自治会組織と情報を共有しあい，地域の事業に生徒が関わっていけるようになればうれしい。加えて，地域の農業や漁業等の第一次産業や大工等の職人などの働き方もぜひ知っていただきたい。もはや身近で見ることのない職業となっており，知る機会が著しく減少している。大学→企業以外の働き方もぜひ学んでほしい。さらに，もっと地域に頼る，もっと地域と連携を図る学校であってよいと感じている。地域事業所のさらなる活用，コーディネーターの活用が必要だと感じている。身近にある職業を知るとともに，ふるさとの魅力や自分の適性を知ること，しなやかな心を育むためには，多様で開かれた考え方に触れることも大切だ。コーディネーターや地域のNPO団体の行っているボランティア活動やワークショップに積極的な参加を促すことはとても有効に感じる。	B	・感染症対策に関わるさまざまな情勢が変化しつつある中，縮小されてきた行事等が少しずつ再開されるとともに，ふるさと・キャリア教育においても新たな活動やその方法を模索し，実践していきたい。今年度は地域人材の活用に焦点を置いてきたが，今後もコーディネーターや地域NPO団体との連絡を密にすることで，新たな資源の発掘とその活用方法を考え，実践していきたい。
					B	ふるさと・キャリア教育の取組を複数回実施した学年と一回実施した学年があった。					
					C	各学年，ふるさと・キャリア教育の取組を1回実施した。					
					D	ふるさと・キャリア教育の取組を実施できなかった。					

③生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により，社会規範を遵守する態度を育成する。	望ましい生活習慣の定着とふるまい向上のため，生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し，生徒の基本的生活習慣，規範意識が向上する。 情報モラルについては，家庭への情報提供し，特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A B C D	生活習慣，規範意識が向上し，ネットトラブル等が起きない。 生活習慣，規範意識が向上。 生活習慣，規範意識が向上せず。 生活習慣，規範意識が下降。	挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じてさまざまな機会を使って繰り返し指導を行った。挨拶の声はまだ十分ではないが、生徒会本部が継続してあいさつ運動を続けている。靴揃えは習慣になってきており、ほとんどの生徒が意識して揃えていた。また、今年度は代議員の取組でロッカーチェックを行い、教室内の整理整頓から落ち着いた雰囲気づくりにつながった。身だしなみについては、生徒会生活委員会が行う毎朝の名札チェックや服装チェック重点週間の活動もあり、多くの生徒が身だしなみに気をつける意識を常にもち、学校生活を送ることができた。 ネットトラブルについては、数件発生した。一時的な感情で発信（発言）したことで、不快な思いをした生徒がおり、家庭と連携して指導を行った。また、外部の専門家を招き、学期に1回ずつ情報モラル講演会を実施し、全校生徒のモラル向上を図った。長期休業前には重点的に全校生徒への指導を行い、特に相手のことを考えた行動をすること、一人で抱え込まないことを強調して伝えた。一方、PTA総会等の機会を通じ、保護者に対しても啓発を行っていたが、昨年度に続いて、感染症拡大防止の観点から研修会未開催など十分な実施には至らなかった。「スマホ・インターネットの家庭内の約束」が徐々に形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないことが課題である。	B	・「挨拶」「返事」「靴揃え」は定着し，生徒会活動で学校内での意識が向上しているのは素晴らしい。引き続き指導をお願いしたい。今回，ロッカーチェックを代議員の取組で実施された。授業参観等で各教室のロッカーの整理整頓ができていないのが目についていたので，よい試みである。これからも継続的に行ってほしい。しかし，学校外での挨拶に関しては元気よく挨拶を返してくれる生徒も多くいるが，例年よりも挨拶が返ってくる生徒が少ないと感じる。「靴揃え」も「挨拶」も学校が指導してするのではなく，基本家庭のしつけであると考えるが，今一度家庭や地域，学校でまずは大人から気持ちのよい挨拶のできる環境をつくるという意識ももちたい。 ・継続的に行っている情報モラルの取組だが，今年もネットによるトラブルが数件発生したのは残念。表に表われていない深刻なトラブルがないか心配する。ネットトラブルについては，使わない，巻き込まれない，予防の考え方は重要だがこれだけでは時代にあわない。巻き込まれてからどうするかといった具体的な対応策やリスクについて学んだ方がよい。そのレベルが全体的に上がる方が，集団でやり取りする場で「こういった行動はやめよう」と諌められる子が増えると思う。また，中学生といえども行動の責任が発生すること，それを自分事として学ぶ必要がある。 その一方で，生徒・保護者による学校評価から，平日深夜12時やそれ以降の時間までゲームやネットをやっている生徒が見受けられ心配になる。PTAの「スマホ・インターネットの家庭内の約束」は形骸化してきている。生徒への指導はもとより，保護者への今一度の意識啓発をお願いしたい。	B	・定着し，できているものはより良いものになるように継続していきたい。挨拶は自分から自信をもってできるように，それを認め合える学校内の雰囲気づくりを生徒会と連携をして行いたい。 ・ネットトラブルについては，全校集会、保護者への啓発文書を年度末に行った。知識はあるが，自分ごととしていざというときに捉えられていないことを生徒に伝えた。自分の行動が実際にどういうことに結びついているか，考えさせられる指導を継続してしていきたい。
④健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて，生徒の自己健康管理力の向上を図る。また，「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して，自己健康管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	1日のスタートの要となる朝食摂取について，昨年度までの朝食摂取の取組を土台に，朝食の内容の充実を図るための取組を行う。栄養教諭と連携を図り，家庭科や学級活動で指導した内容を長期休業中に家庭で実践する場を設定することで，生徒及び家庭への啓発を行う。	A B C D	積極的な健康管理により，健康に配慮した朝食摂取が定着。 自己の健康管理により，健康に配慮した朝食摂取が習慣化。 自己の健康管理に努力が必要。 健康管理が不十分。	夏休みと冬休み中に「朝食チャレンジ」の課題を出し、3学期初めに取組についてのアンケートをとり、生徒の意欲や内容について評価した。夏休みは3つのチャレンジから選択する形にしたが、取組の内容に差が見られたので、冬休みは「みそ汁やスープなどの調理をし、献立を整えて食べる」というものに変更した。 「チャレンジ期間中、朝食への意識や内容に変化がありましたか」という質問に対して、「自分でできることをしたり、朝食の品数や内容を考えたりするなど、変化があった」と回答したのは1年生が42%，2年生が45%，3年生が48%であった。学年が上がるごとに自主的な取組が増加しているといえる。一方で「チャレンジ期間以外、チャレンジ終了後、あなたの意識や朝食の内容はどうですか」という質問に対しては、「朝食への意識は高く、内容も満足できるものが続いている」と回答したのは、1年生が33%，2年生が26%，3年生が42%で、「チャレンジ期間以外は取り組んだり考えたりしていない」という回答が全学年とも半数を上回った。保護者の方のコメントからは、「この機会に調理や朝食について関心をもててよかった」「これからも調理をしてほしい」など好意的に見守ってくださった様子がうかがえた。 来年度への取組についてもアンケートで聞いたところ，「今回のように長期休業中の取組を行う。」「授業で朝食に関する調理をする。」「専門の方（栄養士さんなど）のお話を聞く。」への回答が多かった。長期休業中の取組に改善を加えながら，栄養教諭などとも連携し，生徒自身が考え，取り組める内容の工夫をして生活改善やその定着を図っていきたい。	B	・夏休みと冬休み中に実施している「朝食チャレンジ」は，心身ともに成長期の中学生にとって大変意義のあるものと思う。生徒や家族にとっては，負担なく取り組みながら食事に向き会い，食事の大切さや栄養バランスなどを考える機会になっている。 一方，保護者アンケートにもあるように，生徒が「食」についての正しい知識や意識を高めるための授業を，専門家を通して定期的に実施してほしいという意見もあり，長期休業中以外への意識の向け方等に改善は必要である。今後は，関係者の方の意見も聞いたり，ミッションをクリアしていくように親子で楽しみながら取り組める企画を考えたりしながら，普段の生活での定着を図ってほしい。また，ニキビ防止や美肌のような美容系の視点を取り込む、お菓子作り（健康的な配慮あり）などもあれば，さらに興味がわくのではないだろうか。	B	・「朝食チャレンジ」は，改善を加え取り組みたいと思う。 ・アンケートの回答にもあるように長期休業中以外にも専門家からのお話を聞く機会を設け，「食」への意識を高めるチャンスを増やすことは意義があることと考える。また，ご指摘のように中学生にとって興味や関心が高い内容との関連づけは，「食」が体作りの基礎であることを意識させるものであり，参考にしたい。
	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め，生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かな実践を通して，運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため，家庭での健康・体力づくりを行う。体育の授業において保健分野からの指導など授業改善に努めていく。長期休業前に，体力づくりの啓発を行い，家庭との連携を図る。	A B C D	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践。 計画的に健康・体力づくりを実践（1日40分以上）。 計画的に健康・体力づくりを実践（1日15分以上）。 健康・体力づくりが不十分（1日10分未満）。	多くの生徒が運動の必要性を理解し、意欲的に運動に取り組む姿勢が見られた。昼休みにも校庭や体育館に集まる生徒が学年問わず多かった。長期休業前は、家庭でも運動を継続するように体育科が中心となって呼びかけた。しかし、各学年の長期休業中の運動時間を正確に集計することができなかった。 今年度も、生徒会体育委員会の取組として「体力づくり」を行い、昼休みの校庭ランニングを行った。コロナ禍であり、全員で集まっての活動が難しい中、生徒を中心に対策を考え、頻度は少なかったが実施できた。 新型コロナウイルス感染症の拡大により、家で過ごす時間も増え、「運動したい」「体を動かしたい」「汗をかいてすっきりしたい」という生徒が増えてきているように感じる。生徒の意欲に沿った指導を心がけ、例示を増やして選択の幅を広げ、誰もが進んで運動に取り組めるような工夫を引き続き考え、来年は目標が達成できるようにしたい。	C	・昼休み中にグラウンドで走り回る生徒の姿をよく見る。また自宅においても自主的に体を動かしたりする生徒も増えており，多くの生徒が運動の必要性を理解し，自分の健康についての意識が高まっていると感じる。加えて，生徒が中心となって対策を考え，体力づくりを実施していることも主体性を育むうえでも大切なことだと思う。 しかし，40分以上を目標とするのはレベルが高く難しいのではないかと思う。特に，運動部でなければ，家庭での運動の動機が少なく，目的ももちづらい。ネット動画のダイエット系，筋力アップ系，柔軟系を活用し，目標をたて，その進捗を共有することでやる気を出すなどをすればよいかもしれない。また取り組みやすい選択肢を設けること（例えば，鬼ごっこのような遊びにちかいものなど）でより実践しやすくなり，体力づくりとともに良好な人間関係を構築するきっかけとなるのではないか。 今後もこの取組は継続し，より効果が挙がるような内容を模索していただきたい。	C	・ご指摘いただいたことから，生徒の実態に合わせた目標になるように見直しを図りたい。 ・体を動かしたい気持ちは多くの生徒がもっているため，多くのきっかけを授業や委員会活動を通じて与えていきたい。 ・授業の振り返りで友だちと協力してプレーをしたことが良い関係づくりに繋がったという声も挙がったので，そういった声が来年度もどんどん挙がるようにしたい。
⑤安全管理・指導	学校安全の推進	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに，毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと，毎月15日の安全点検実施に伴い，点検・修繕・修理を迅速に行う。 食物アレルギー対応委員会を組織し，実態と対応を把握する。	A B C D	マニュアル改善，点検・修繕等を迅速に実施し，安全推進。 マニュアルの改善，点検・修繕等を迅速に実施。 点検がきちんとでき，必要に応じ修繕・修理。 点検はきちんとできたが，修繕・修理が不十分。	校舎の多くの箇所で破損・故障が見られ、市教委と連携しながら改善・改修を進めている。今後も市教委と連携しながら、速やかな改善・改修に努めたい。また、毎月定期的に実施している安全点検では、今年度も生徒目線による安全点検を実施した。その中で一番気になることは、新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けて、サーキュレーターや扇風機、空気清浄機等を各教室に設置したため、コンセントがたりない状況である。ワークスペース等の活用も視野に入れて市教委と相談をしているところである。 今年度も危機管理マニュアルの見直しを図るとともに、病気や様々な特性を抱える生徒の理解にも努め、その危機対応のため、市教委や教育事務所等と連携を図り、必要に応じて複数名のSCの勤務体制の構築等、万一に備える体制づくりができている。また、養護教諭を中心にアレルギー面談の時間を設けて、丁寧に対応するなど安心安全な体制が構築できている。	B	・今年度も生徒目線による安全点検を実施して，生徒たちからの教員が気付かないいくつかの改善の指摘が見られたことはよかった。このことは，生徒自ら物を大切に使おうという気持ちにつながったり，大人とともに発見することが学びになり，改善するとどうなるかを学んだりできるよい機会にもなると感じる。 ・校舎等の経年劣化は不可避だが，改善・改修は市担当課と連携をとり，対応をお願いしたい。そして，より綿密な安全対策・危機管理対応が必要になり，各種設備や建物の改修工事がこれから増えてくると思う。それに伴い，工事中足場などが珍しくて近づく生徒も中にはいると思うので，生徒を巻き込む事故などが発生しないように留意していただきたい。併せて，コロナ禍で導入した設備や運用方法など見直しが今後必要になると思われるが，必要なものについては，粘り強い予算要請や，地域など学校内外の関係者も含めた行政への要請も一案である。 ・危機管理マニュアルについては，これからも臨機応変に見直しを図り，緊急時に即対応できるようにしてほしい。また，命に関わるアレルギーをもつ生徒たちに養護教諭を中心に一人一人面談し，丁寧に対応できたことは大変評価する。情報を早期に把握し，保護者や小学校とも連携し，個々に応じたよりきめ細かな対応の継続を望む。	B	・来年度も引き続き，安全点検や市教委と連携を図りながら安全対策・危機管理対応を実施していきたい。また，危機管理マニュアルやアレルギー対応についても細心の注意を図りながら取組をよりよいものにしていく。

⑤安全管理・指導	安全対応能力の向上	安全意識を高め，危機回避能力，危機対応能力の向上をめざす。	学校事故，交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話，実習等で，生徒の安全意識の向上を図る。特に，自転車通学生の交通マナーを遵守させる。消防署等と連携した計画的な避難訓練を実施する。	A	危機回避の講話，実習等の実施で安全意識が向上。	例年１学期に交通事故が多発するため、入学前の入学説明会でも自転車の乗り方について指導を行うとともに、事前に練習を行うよう呼びかけを行っている。また、入学直後には警察の方を招き、講話を行うとともに、学校周辺での乗車練習を行った。また、PTA活動の１つである地区懇談会が新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ここ数年中止となっているので、保護者の方へ通学路の危険個所等についてのアンケートを実施した。それを踏まえ、市教委へ報告するとともに、本校でも安全指導を行っている。今後も引き続き、安全指導を充実させ、事故による怪我等がないようにしていきたい。 避難訓練については、１学期は浸水害を想定した訓練を実施した。訓練後には、江津市出前講座「災害への備え」をお願いし、市役所総務課の方に来ていただき、講習会を実施した。また、2学期は火災を想定した訓練を行った。多くの生徒が真剣に取り組み、良好な避難態度であった。3学期は休み時間に訓練を行い、生徒の避難意識の確認しようと考えている。 薬物乱用防止については、保健体育の授業で扱うとともに、3年生については3学期に外部講師の方から講話をしていただく予定である。	B	・自転車通学に関しては，登校時はルールを守って通学していると思う。また，通学路の危険箇所の把握をするための保護者アンケートの結果を踏まえ，危険箇所の改善を警察や行政に働きかけて，事故が起きる前に対策を図るように素早い対応及びより徹底した安全指導をお願いしたい。 一方で，下校時や休日についてはマナー違反（ノーヘル，並列）や危険運転の事例が少なからず見られ，昨年度に比べたらマナーが悪くなっていると感じる。実際，平下歯科横の高架下を急に飛び出してくる自転車と接触しそうになったことがあり，引き続き生徒・保護者ともに通学路の危険箇所の確認を定期的に行う必要があると感じている。 このコロナ禍の中，PTA地区懇談会が開催出来ていないと聞いたが，地区懇談会は教職員と保護者が相対で接する貴重な場の一つなので，そういった場で学校と保護者で江中校区全域の危険箇所を共通認識することで，我が子への声がけもしやすくなり，学校と保護者の連携をより図れるのではないかと思う。 ・避難訓練は様々な場面を想定しながら実施している。生徒も真剣に取り組んだようで，今後もいざというときに素早く行動に移せるように取り組んでいただきたい。	B	・自転車マナーは近年課題となっているので，継続的な指導・呼びかけをしていきたい。 ・避難訓練については，計画的に取り組むとともに，通学路の危険箇所の確認も併せて行っていく。
					B	危機回避の講話，実習等を実施。						
					C	危機回避の講話，実習等を一部実施。						
					D	危機回避のための講話，実習が不十分。						
⑥特別支援教育	校内・特別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し，個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実させる。	適切な実態把握をもとに作成した個別の指導計画及び個別の教育支援計画により，支援を充実させる。	諸検査や複数の教員での観察など実態把握を行った上で，個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成し，遂行する。	A	個別の教育支援計画，指導計画を全職員で遂行し，成果が表れた。	特別支援学級、通級指導教室の生徒全員に対して個別の教育支援計画および個別の指導計画を作成した。年度当初の職員会議ではそれらの計画の意義や作成の手順を法的根拠や学習指導要領に基づき説明し、理解を得た。通常学級の生徒を対象にした教育支援計画や指導計画の作成は3年目になり、通常学級のすべての担任がその生徒に合った支援について的確な計画を作るようになった。また、指導計画は学期ごとに振り返りをし、生徒の変容や手立ての妥当性について検討し、次学期に改善するようにした。しかし、学級担任や教科担任が主に計画の実行に携わることが多く、全教職員への計画の内容の周知・徹底は図れなかった。そのため、来年度は職員会議で各担任から説明をするなどさらなる工夫が必要と感じる。また、校内だけの支援では改善しないケースも増加しており、教育支援計画を作成する際に各関係機関を巻き込んだケース会議の開催が必要な場合もあると感じている。	B	・通常学級の生徒を対象にした生徒にあった個別の支援計画，指導計画を作成し，遂行していくことに大変尽力されている。また特別支援が必要とされる個々の生徒に対しても将来を見据えた支援計画を作成し実施しておられることも大変評価できる。しかし，その数は年々増加傾向で１０年前よりおよそ2倍である。個々によって支援や指導も異なるため，校内だけの支援では改善されないケースが増えていると聞く。教職員の負担の軽減や保護者の相談の窓口を広げるためにも，各関係機関との連携を密に図り，支援が後手後手にならないようお願いしたい。	B	・来年度も個別の教育支援計画，個別の指導計画を作成していく。在校生については全担任が１学期分の個別の指導計画を作成することにしているので，その指導計画を年度当初の職員会で周知徹底を図りたい。
					B	個別の教育支援計画・指導計画を実行した。						
					C	個別の教育支援計画・指導計画を実行したが，計画の改善が必要。						
					D	個別の教育支援計画・指導計画を実行しなかった。						
	関係機関との連携，他校との交流の推進	教育，医療，福祉等の関係機関と積極的な情報交換を行うことによって，連携を強化する。	医療，福祉等の関係機関，近隣の特別支援学校と積極的な情報交換を行う。	関係機関，近隣の特別支援学校等との定期的な連絡体制を整える。	A	各自に必要な間隔で定期的な連絡を行い，支援が充実。	生徒の実態に合わせ、医療への情報提供を行った。それにより、学校での様子を正確に伝えることができた。また、受診同行や書面による質問に対して医療からの回答をいただいたことで、見通しをもって支援にあたることができた。特別支援学校との連携は教員不足による多忙のため、１学期はなかなか実施できなかった。2学期以降は、本人、保護者、担任からの要請を受けて巡回教育相談を実施した。その中で保護者や教員だけでなく、生徒本人にも具体的な支援や特性について知らせることで自己理解が進んだ。来年度も引き続き、連携していきたい。	B	・関係機関との連携がよりよい成果を出しているようで大変評価できる。また各担任が医療機関に情報提供したり受診同行したりして，生徒の実態にあわせ，生徒及び保護者に寄り添ったきめ細やかな対応をされたことは，生徒本人のみならず保護者の方にも安心感や信頼感をもたらしたと思う。教員も医療機関から直接具体的な指示を得ることができるので，見通しをもって支援にあたれたことは双方にとってもメリットである。また，巡回教育相談における情報交換でも，生徒本人にも具体的な支援や特性について知らせることによって自己理解が進んだことは，保護者や生徒本人にとっても意義あることだと思う。とてもよい取組ではあるが，担任や学年部のみに負担がかかることのないよう，教職員全体での周知や連携，可能な範囲での業務部分のマニュアル化などができるとよいと感じる。	B	・今年度，関係機関との連携で得られた情報を来年度に確実に引継ぎ，さらに充実した支援に繋げたい。また，来年度は卒業学年に進路選択が例年よりも難しい生徒が数名いる。そのため，特別支援学校や高等学校への相談，見学を早めに実施し，進路保障に努めたい。個別の教育支援計画や個別の指導計画は職員会議で周知徹底を行いたい。また，業務について特別支援教育コーディネーターのToDoリストはすでに作成済みであるが，個々の業務のマニュアルを作成し，特別支援教育コーディネーター以外の教員にも知らせていきたい。
					B	各自に必要な間隔で定期的な連絡。						
					C	学期に１回以上の連絡。						
					D	連携，連絡とも不十分。						
⑦研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い，授業力の向上に努める。そして，生徒の「つながる力」を育成する。	校内研修の充実により，「次の授業や家庭学習に活かされる振り返りの設定」，「自分の考えを伝え合い，深め広げられる話し合いの設定」，「学習内容が将来や社会とつながっているという意識づけ」を実践する中で授業力の向上をめざす。	授業改善アクションプランの3つの具体的取組（①「振り返り」の工夫，② 自分の考えを伝え合い，深め広げられる話し合いの場の設定，③今学んでいることが自分の将来や社会とつながっていることを意識できる授業づくり）をもとに授業実践をすすめ，校内研修を計画的に行い，教職員どうしが学び合う機会を設ける。	A	１人１回以上の公開授業の実施により授業力が向上。	今年度も１人１回以上の授業を公開し、授業力の向上に努めた。教職員による学校評価での「授業研究に努め、授業力の向上を図ることができたか」の肯定的意見の割合は、１学期は83%から2学期は100%と向上している。2学期は、道徳の公開授業をもとにした職員研修で学びあうことができた。研修を活かして「自分の考えを伝え合い、深め広げられる場」を道徳にも取り入れていった。また、「振り返り」の工夫では、生徒による学校評価の「先生は授業の『振り返り』をきちんと行っている」の肯定的意見が１学期は88%から2学期は93%と向上しており、授業での「振り返り」が定着してきたと考えられる。ただし、生徒による学校評価の「私は、毎日、家庭学習に取り組んでいる」の肯定的意見が１学期は74%、2学期は65%と低下しており、学習時間調査でも１、2年生は昨年と比較しても学習時間が少なくなっている。このことから「振り返り」によって新たな学習意欲が引き出され、家庭学習へ繋げていくことは十分できていないと考えられる。今後は、生徒の学習意欲を引き出し、家庭学習につながる「振り返り」の工夫にも組んでいく必要がある。キャリアパスポートで、「今、学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えるなど、学ぶことや働くことの意義について考えましたか」の「よくできた」の回答の１学期から2学期の変容は、１年生で86%→92%、2年生で85%→79%、3年生で93%→96%となっている。将来に繋がる学習をしているという意識が生徒に広がることで学習意欲の高まりも期待できるので、引き続き、将来への繋がりを大切にした授業展開を意識していきたい。	B	・今年度も一人一回以上の公開授業や職員研修を計画的に実施され，授業力の向上を図ることができたことは評価できる。また，キャリアパスポートで，学ぶことが将来の自分にとってどのように役に立ち，社会で生きていくうえで，いかに大切なことであるという「つながる力」が授業を通して生徒に徐々に浸透しつつあることは喜ばしい。 一方，家庭学習のところでも触れたが，授業での「振り返り」が定着しつつあるが，そのことが生徒の学習意欲につながっていけばよいが，まだ十分ではない。「振り返り」のさらなる工夫により，生徒が自分からもっと調べてみたいという意欲をもてるよう，引き続きのブラッシュアップを望む。またペアや小グループを作って，それぞれの「振り返り」をシェアしあい，それを通じて，自分の言葉を口に出す習慣づけなどにつなげていけないか考えてほしい。	B	・来年度も，公開授業や職員研修を計画的に行い，研究主題を意識した授業改善を目指す。 ・生徒が「もっと調べたいこと」や「定着が不充分な学習内容」が分かり，その復習への意欲づけができるような「振り返り」の工夫をする。
					B	１人１回以上の公開授業を実施。						
					C	公開授業を実施。						
					D	公開授業を実施できなかった。						

⑧保護者，地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより，学級通信等を定期的に発行し，ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って，学校だより，ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては，載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また，メール配信システムを緊急連絡だけでなく，諸活動の案内としても有効に利用する。地域への情報発信を実施する。	A B C D	学校だより，学級通信，HP等による有益な情報を定期的に発信。 学校だより，学級通信，HP等を定期的に発行・更新。 学校だより，学級通信を定期的に発行，HPは時々更新。 学校だより，学級通信を定期的に発行，HPは更新できず。	今年度も、HPは毎月１回の学校だよりと次月行事予定表を定期的に更新することができた。生徒会や各学年学級の様子については、学年主任や学級担任がそれぞれ通信を作成して保護者に伝えることができた。しかし、部活動の大会結果報告等は、すべての結果を発信することができなかった。今後は、細かな分担をして、保護者をはじめ地域の方にもお知らせできるように努めたい。また、今年度は地域への情報発信として、各学期に作成しているPTA広報誌を民生児童委員の皆さまと校区内のコミュニティーセンターへ配付させていただいた。今後の活動については、連絡協議会でのご意見を聞いて取組を考えていきたい。 メール配信システムについては、緊急時及びそれ以外（部活動）にも利用することができている。現在全保護者に登録していただいている。	B	・今年度も新型コロナの影響を受けて，各種行事が中止や縮小され，保護者も参観日や地区懇談会などもなく，学校へ足を運ぶ機会がほとんどない状況の中で，ホームページや学校だよりを通して学校や生徒の様子を少なからず把握できたことは有難かった。また，地域住民への発信については新たにPTA広報誌を校区内のコミュニティーや民生児童委員に配付した。江中の体制や学校内の様子が分かり，これまで以上に身近に感じることができた。これからも地域への発信を様々なツールを使ってお願いしたい。 しかし，陸上で注目をあびているドルーリー朱瑛里さんのような容姿や成績で注目されるケースもある。学校側が責任を負うことではないが，情報公開から発生するリスク，その対応方法などは考えておく必要がある。 ・今後は少しずつ学校行事なども通常に戻り始め，学校に行く機会も段々と増えていくと思うので，今一度，先生方の顔と名前を一致させる機会があればと思う。 ・メール配信システムは全保護者が登録し，緊急時のみならず学校の諸活動の連絡にも役立てることができたことは喜ばしい。メールシステムの配信頻度や内容，時間帯等，分かりやすくとても配慮されていると感じている。	B	・学校からの情報発信を定期的に行うとともに，内容もよりよいものとなるようにしていく。また，メール配信システムの新たな活用方法がないか考えていく必要がある。
	学校間の円滑な連携・連動の推進	異校種間の連携・連動を図り，生徒の人間力の向上をめざす。	小中高の連携・連動を密にして，学校間の円滑な連携に努める。	小中高との交流・情報交換会，授業公開を積極的に行う。また，異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	A B C D	小中高の計画的な交流により連携が充実。 小中高の計画的な交流を積極的に実施。 小中高の交流を実施。 小中高の計画的な交流が不十分。	校区内の小学校との交流については、10月に中学校に集合する形で「授業・部活動体験」を行った。授業と部活動体験の希望をとり、授業は数学と理科の2教科と特別支援学級5組の英語の授業行った。5組の授業では該当児童と中学校生徒との交流もでき、よい体験となった。参加児童の感想から、全体的に授業体験も楽しくでき、充実していた様子が分かった。部活動体験は、天候に恵まれ屋外も屋内も体験ができた。各部活動では、生徒が積極的に児童に関わり、優しくいろいろな事を教えており、児童は中学校生活への期待が高まったと思われる。 ９月に行った情報モラル講演会では、校区内の小学校6年生と本校生徒と各校の教職員がお話を聞き、共通理解したことを今後の指導につなげていった。 生徒指導面の連携では、学校警察連絡協議会での情報交換や、月例の校長会、教頭会で情報や指導事項の共有に努め、日々の指導に活かすことを続けている。 中学校の特別支援学級への進学に際して、事前見学等も受け入れている。進路選択の参考になるので効果的である。校区内連携特別支援教育コーディネーター部会も行われる予定であり、そこでの情報等を今後の指導に活かしていきたい。	B	・中学校区の小学校との交流については，双方にとって有意義な体験であるので，引き続きの実施をお願いする。今後は，短時間でも生徒たち自らが考えて交流する時間などがあると，より生徒たちの自信につながっていくように感じる。生徒たちに任せて委ねてみるような取組を取り入れるのはどうだろうか。また，そこでの振り返りも，生徒にとっては有効に働くと感じる。 ・近年様々な支援を必要とする子どもが増えているが，事前見学などの実施は，その子の進路選択の参考や不安の払拭につながっているのは大変よい試みである。引き続きの取組をお願いしたい。また今後校区内連携特別支援コーディネーター部会も開催されるそうなので，より充実した支援体制ができれば素晴らしい。生徒指導の面でも警察連絡会や校長・教頭会などを通して意見交換や情報共有されることによって色々な問題解決に役立ててほしい。	B	・小学校6年生の生徒が授業と部活動の体験ができる活動は引き続き行い，小学生が中学校生活へのイメージをもって入学できるようにする。また，生徒会の企画も時間があれば計画したいと考える。例年2月に行われている説明会で生徒会本部が，江津中学校を紹介する時間があるので，その内容を充実させていくなどの工夫も考えられる。 ・小学校での情報モラルの指導内容を踏まえて，中学校での指導をしていくと効果的であるので，タブレットの使用方法や情報モラルの指導について小学校の情報交換をする場を設けることも必要であると考える。